

「満洲」 建国大学に関する書誌

山 根 幸 夫

建国大学の存在は、もはや忘却の彼方へ消え去ろうとしている。筆者は以前に、この大学について2篇の論文¹⁾を発表したことがあるが、1938年に創立された大学で、1945年の8期、9期入学生まで、その存続期間はわずか7年余であった。卒業生、在學生はすでに70歳前後になってしまった。日本の敗戦と同時に、建国大学も瓦解してしまったから、同大学に関する公的資料はほとんど残っていない。同大学が存在していた時期に刊行された資料と、敗戦後、建国大学同窓会、同期会などによって刊行された資料に分けて紹介したい。以下に挙げるものは、文書は含まず、刊行されたものに限定する。

(A) 建国大学存続中の資料

1. 『建国大学要覧』 建国大学 康德8(1941)年7月 B5 88頁

最初に開学勅書を掲げ、つづいて大学年記、建国大学創設要綱、建国大学令、建国大学参議会官制、建国大学学則、建国大学参議員、職員、在學生、附表、學生出身地別調、學生入学前學歷調を収めている。建国大学の構成を示す、公的な唯一の資料である。在學生は後期1年、126名、前期3年、146名、前期2年、147名、前期新2年²⁾91名、前期1年77名が収録されている。

2. 『研究院月報』 創刊号～45号 建国大学研究院編 1940.9～1945.1

3. 『研究期報』 第1～5輯 建国大学研究院編 1941～43

建国大学の研究紀要である。

4. 『建国大学創立記念講演集』 建国大学研究院編 1939

康德6(1939)年度の記念講演集である。

5. 『建国大学塾月報』 創刊号～7号 1942.6.15～1943.11.20

6. 『建国』 第3号 建国大学塾編 1943

第1号, 第2号の所在は確認できない。

以上の如く, 日本の敗戦前, 建国大学が存続していた間に刊行された公的な資料は, 以上の6点しか残っていない。故に, 建国大学の全容をこれだけでは絶対に解明できないのである。それ故, 建国大学について研究するためには, 戦後, 建国大学同窓会, 同期会, 建国大学教員, 学生らによって編集されたり, 執筆された文献に依存するしかない。

(B) 敗戦後, 編集, 執筆された資料

7. 『建国大学年表』上, 下 湯治万蔵(2期)編 建国大学同窓会
1981年11月 B5 570頁

巻首に坂東勇太郎(1期)の次のような序文を掲げる。「惟えば昭和41年9月『建大史資料』創刊号を発行してから, 15年の歳月が流れた。この間に送った同資料は僅かに6号, 頁数にして230余頁に過ぎぬ。仮に客臘刊行した訪中記念写真紀行文集『歓喜嶺』をその上に重ねても数えるに足りない。……この間, 編纂顧問に戴いた諸師中, 既に鬼籍に入られた方々は, 作田莊一³⁾先生はじめ30数名に及び, 委員会もまた松井勲(新3期), 中村喬一(4期), 伊藤肇(6期)の3君を失った。しかし, 湯治万蔵君が, いま我々を代表して……『建国大学史』の確固たる基礎を置かれた」。

凡例の中には, 多数の引用文献が挙げられている。但し, 公的文献は『建大研究院月報』『建大塾月報』『建国』のみで, 他は在学生の「塾生日誌」をはじめ, 建大関係者の著書, あるいは『満州国史』『満州国年表』等を利用しており, 各期の同期生会誌も活用されている。個別の「塾生日誌」は個人記録ではあるが, 在学中に書かれたものであるから, 資料的価値はきわめて高い。本書は「年表」ということになっているけれども, 一種の編年体資料集というべきものかも知れない。但し, 建国大学に関するあらゆる事項が網羅されているわけではなく, 欠落している事項も多い。今となっては完全な「年表」も「大学史」も作ることは不可能なことである。「あとがき」に, 「日系学生によるものは, 所詮, 建国大学の一面史にすぎません。日系以外のすべての人々によって語られるとき, 正史の編纂をみ, さらに裏面史,

野史がしるされ, はじめて全容が展望される, と思うのです」という湯治氏の言葉は傾聴すべきものがある。

8. 『歓喜嶺遙か——建国大学同窓会文集』上, 下 『歓喜嶺遙か』編集委員会(代表, 2期・藤森孝一) 1991年6月 B5 (上) 401頁, (下) 421頁

本書は建大同窓生の回想文集である。260余名の文章が収められている。全体が8章に分けられ, 冒頭の「開学のころ」には, 江原節之助「民族の苦悶」⁴⁾と中村正二(1期)「意外のこと」の両篇が収められている。以下「大学の理想と現実」「塾生活の明け暮れ」「課外の活動」(以上, 上巻), 「師・友を憶う」「学外の見聞」「開学のころ」「戦後を生きて」の各章となっている。最後の1章を除き, 各人が在学中のことを色々の方面から語っている。他にも, 各期ごとの文集が編集されているが, 本書が最も充実している。筆者たちの在学中の体験とか思想が生き生きと語られている。巻末の「資料」には, 同窓会活動のほか, 建大生による建大を対象としたもの, または建大生以外の執筆による, 建大または建大生を主題とするもの, 会報, 会誌, 一般出版物などを列挙している。最後の, 4期・桑原亮人「あとがき」には, 「我々が, 今は中国東北地区と呼ばれる, かつての満州の, あの歓喜が丘で過ごした哀歎の日々を, 書きしるしたい, 我々が見たもの, 感じたものを書き残しておきたい, との願いから本文集は企てられた。……本文集の中にも, 真向から建国大学否定論を述べた同窓生がいる。礼讃一辺倒でなかったのは, むしろ建大生のバランス感覚とも受け取れるのだが, いずれにせよ, 建国大学の位置づけは百年, 二百年後の史家に俟つほかはない, というのが同窓生大方の実感であろう」と述べている。但し, 筆者をして言わしむれば, 敗戦後半世紀を経た現在, 建国大学の位置づけははっきりできると思う。

9. 『歓喜嶺——建国大学第一期生文集』 建国大学第一期生会(代表, 作田良夫) 1989年7月 A5 305頁

本書は, 1938年に建国大学第1期生として入学した同期生の文集である。執筆者は35人, 未亡人3人である。彼らが入学した時, 日系70人, 満系⁵⁾46人, 台湾系3人, 朝鮮系10人, 蒙古系7人, ロシア系5人, それに加えて後期入学者が3名いたから, 合計144人であった。

「付記」に「入学時塾名簿」があり、刊行当時の健在者は、日系51人、満系28人、台湾系3名、朝鮮系5名、蒙古系4名、露系5名、計96名で、48名は死亡者並びに消息不明者であった。

作田氏は「あとがき」に次のように述べている。「同じ仲間の文集は楽しい。作品を読んでいると、文とは関係なく、友の顔やら、声やら、学生時代の出来事や、歓喜嶺の風や光が、そしてそれぞれの歩いた人生と生きざまが浮んでくる。言足らざるも、言外の情、意が溢れてくる。〈送る6年の青春〉と歌ってから、50年の春秋が過ぎて今日に至っていると思うと感慨無量なものがある。昭和の時代に生きた我々だが、昭和を送って、今この平成の元年に文集が発行できたという 것도何かの縁かも知れない」。

10. 『二期——建国大学入学五十年記念誌』 建国大学二期会（代表、橋満雄） 1989年4月 B5 237頁

冒頭に「巻頭に寄せて——二期生の弁」（藤森孝一）、次に「塾生名簿」がある。全学生が塾生であるから、塾生名簿とは同期生名簿に他ならない。続いて「同窓会総記」「二期会の歩み」があるが、本書の主体は「二期生の過去・現在・未来」である。本章には同期生たちの文章が収められている。日本人同期生の文章が42篇、在中国同期生のそれが13篇（手紙をも含む）、在韓同期生のそれが2篇、在台湾同期生のそれが1篇、在ソ連同期生1篇となっており、「五族」すべての文章が含まれている。次には「同期生のご遺族」「塾頭先生とご遺族」（塾頭としては、西元宗助、寺田剛両氏の文章を含む）が続き、「追録」として中国人同期生の文章が補足されている。これだけの文章を集めるには、編集委員は随分苦勞されたことであろうと思われる。

最後の「あとがき」（橋満雄）は次のように述べている。「二期生は在学中から『言挙（ことあげ）』せず、ひたすら『行』に励んできた。そのせいか、終戦後から今日までの40数年間、一冊の文集も出したことはない。月移り年代ってここに50星霜、建国大学入学50年という記念すべき年を前に、有志相図り、記念誌発刊を企画したところ、幸い国内外から多数の寄稿を得て、ここに『建国大学入学五十年記念誌——二期』の上梓を見たことは、喜びにたえない。思い起こせばこの半世紀、それぞれに激動の時代を乗り越え、懸命に走り続け、ようや

く安定を得て華甲を迎えた。そして、古稀も間近い。建国大学はわれわれにとって何だったのか……は、永遠の課題であり、その評価については、意見の分かれるところであるが、われわれが6年間塾において起居を共にして得た厚い友情には、いささかも疑いを挟む余地はないと確信している。ここに建大卒業以後の各人の自分史と、現在の心情を綴った手記を一本にまとめ得たことは、二期生が友情を絆として打ち立てたモニュメントともいえるのではないかと自負する次第である。』

11. 『建国大学九期生』 建国大学九期生刊行世話人会（代表、河辺善太郎）編 1995年5月 A5 215頁

第九期生というのは1945年の入学で、建国大学に在学したのは僅か半年間であったにも拘わらず、現在に至るまで同窓の結束が保たれていることは注目に値する。執筆者はすべて日本人で、35名にのぼる。50年を経過しても、彼らの建国大学に対する思いは消えないようである。本書の中で、特に私の注目をひいたのは、内藤昭「建国大学と五族協和」、および中久郎⁶⁾「民族協和の理想——『満州国』建国大学の実験」の両篇である。なお、編集者は同期生たちに対して、次のようなアンケートを行なって、その回答を整理している。質問内容は、1) 受験・渡満・入学について印象に残っていること、2) 塾生活の思い出、3) 学科・訓練・課外活動についての感想、4) 終戦時の状況、5) 終戦後の生活はどうだったか、6) 引上げ前後の様子、の6項目である。回答者は26名、そのうち24名は感想文の寄稿者、2名は然らざるものである。このアンケートは26名の同期生たちの行動と思想を対比するのに役立つであろう。最後に刊行世話人会による、次のような「あとがき」が添えられている。「開学50年を迎えるにあたり、記念誌の刊行の話が起こったのは昨年早春の頃である。六月、大阪での同期会で全体の構想についての相談がまとまり、さっそく準備に取りかかった。何回かの世話人会を経て、刊行計画が決まったのは9月である。同計画では刊行の趣旨を次のように述べている。『私たちは戦争末期の昭和20年に建国大学前期に入学し、僅か半歳にして終戦、閉学という事態に遭遇しました。ついで引揚までの1年有余、外地における敗戦国民として、筆舌に尽し難い苦難の生活を余儀なくされており

ます。戦後50年、この機会に同期の仲間があい寄って記念誌を刊行し、私たち一人ひとりのたどった道を、後世に遺そうとするものであります』。

12. 『曙さざす——建国大学六期生文集』 因幡(福守)一男編 建国大学六期生会 1986

13. 『曙さざす——建国大学七期生文集』 因幡(福守)一男編 建国大学七期生会 1981

編者の因幡一男は6期生で、帰国後京都精華大学事務部に勤務していた。同期の文集のみでなく、7期の文集まで引き受けた経緯は不明。

14. 『ひたぶるに、真実に——藤井欽一建大日記抄その他』 湯治万蔵編 1992

藤井欽一(2期)は1945年6月29日、日本敗戦の直前に台湾で戦死した。同期生の湯治(『建国大学年表』の編者)が旧友の日記、その他遺稿を集めて編集の上、刊行したものである。建大在学時期の具体的事実を知る上に、きわめて貴重な資料である。

15. 『建国大学同窓会会報』 1952年5月創刊 1994年に51号刊

1952年5月2日、東京虎の門の共済会館で第1回の同窓会が開かれ、元副総長作田荘一はじめ90名が参集した。この中、22名が元教官であったということは、些か興味ぶかいことである。この席上、作田元副総長が会長に推戴され、これを契機に同窓会会報が刊行されることになった。1年間に1回、もしくは2回刊行されているようである。今、私の手元にある50号(1993.7)の冒頭に、林田会長(3期)の総会挨拶が掲げられているが、「半世紀ぶりに思い出の地長春の歡喜嶺と北京において、念願であった聯歡会⁷⁾をもつことができ、懐かしい中国側同窓生を含めて、それぞれ(長春、北京で)約300名の同窓が苦難の歴史を乗り越えて、心から再会の喜びをかみしめ合ったのは、建国大学同窓会の歴史に特筆さるべき出来事であったと思います」と述べている。その後、同窓会の事業として東北旅行を繰返しているようである。なお、同窓会の事務所は東京都港区新橋1-5-5、国際善隣協会内にある。

16. 『建国大学三期会会報』 建大三期会編

現在40号まで刊行されている。毎号誌名をかえ、思い出深い地名そ

の他を名づけている。例えば、31号は「寛城子」、37号は「包子」という誌名である。

17. 『建国大学四期会会報——楊柳』 建大四期会編 創刊号～26号 1969～

18. 『八旗』 建国大学7・8期会編 創刊号～10号 1978～88

本誌は第10号で終刊となった。私はこの終刊号を建大助教だった内海庫一郎氏(故人)より頂き、保存している。7・8期生は建大の最後の入学生で、その事もある、2期共同で会報を発行したものであろう。第10号の「はじめに」に、「八旗もその回をかさねて……、10号を数えるに至りました。最初は3号まで続けば上出来という気持でしたが、建大同窓会会報とは重複しない同人誌的な会報であったせいか、毎号興味深く多彩で充実した内容のものが出来上がり、特に近年中国同窓からの寄稿もあって、なかなか意義のあるものを出し続けることができました。……しかし継続の原動力であった7期生の寄稿にかげりが見えてきたこともあり、ちょうど10号を機に、従来のような八旗発行にピリオドを打つことになりました」と述べている。

19. 『朋友們』 建国大学7期生会編 1992年に創刊

18の『八旗』が終刊になったため、改めて7期生によって始められたのが本誌である。毎年1回刊行される予定のようである。

20. 『興亡の嵐——満洲建国大学崩壊の手記』 山田昌治(8期) かんき出版 1980 A5

建大入学半年にして、日本の敗戦により、入学したばかりの建大が壊滅の悲運に陥った事実を綴ったもので、建大について述べた単行本としては最も早いものである。

21. 『写真集建国大学』 建国大学同窓会編 1986 B5

建大の卒業生、在学生にとっては懐かしい写真集であろう。

22. 『戦後50年満洲の回想』 水口春喜(7期) 私家版 1995 A5 100頁

著者も1945年の入学で、建大には僅か半年しか在学していない。本書の副題には「建国大学同窓会文集『歡喜嶺遙か』を読んで」とあるように、『歡喜嶺遙か』を中心にすえながら、著者自身の満洲体験と、その後の50年が語られている。「はじめに」に、著者は「手記を見る

と、各民族の学生達の歩んだ人生はまさにドラマチックである。寝食を共にした学生生活、学内の抗日運動と弾圧、ソ連軍の進攻、日本の降伏、つづく『満洲国』の崩壊、建国大学の閉学、シベリア抑留、国共内戦、引揚げ、中国革命の勝利、そして文化大革命など、生死の境をさまよう凄惨な体験をへて、五民族の学生達がこの半世紀の激動の歳月をどのように生き、どのように関わってきたか……何うことができる」と述べている。本文は「満洲・建国大学へ」「満洲と建国大学の崩壊」「反満抗日運動と弾圧」「ソ連軍の満洲進駐」「満洲における国共内戦」「文化大革命での苦難」「中国と人権・民主主義」「社会主義市場経済の中国」「戦後49年の夏を終えて」という構成になっている。著者は最後の章の終り近くで、「日本が中国を侵略しておきながら、中国人に誠意をもって付き合うといっても、そんな『誠意』は何の『誠意』もない『誠意』だ、といった彼 [章毅] の言葉は、半世紀過ぎた今日でも、昨日のことに鮮やかに覚えている」と述べている箇所は、日本人としてはよく心に留めておかねばならぬ点である。

23. 『虹色のトロツキー』1-6 安彦良和 潮出版社 1992~95

本書はコミックであり、まだ月刊『コミックトム』に連載中である。日本人と蒙古人の間に生まれた二世の若者が、煩悶しながらも、昭和10年代の旧満洲で生き抜く生活を描いたアドベンチャー・ロマンである。主人公自身、建国大学に学んだし、時々建国大学に関わる場面が出てくる。まだ未完である。建国大学を理解する一助になるのではなかろうか。

× × × × ×

以上で、建国大学に関連する著書、雑誌類を紹介した。但し、ある著書の中に部分的に建国大学に言及したものは多々あるが、それらに就いては、ここでは著録しなかった。

(C) 雑誌論文その他

中国人の執筆した論文は、次の2篇にすぎない。建国大学に学んだ中国人にとって、建国大学について語ることは、随分気の重いことではなかったかと思われる。

24. 劉第謙「我所了解的偽満建国大学」『吉林市文史資料』4 1985

本論文は、これまで建国大学について書かれたいづれの著書・論文よりも、建国大学の全体像を把握するのに役立つ。筆者は建大6期生であり、建大に対して非常に厳しい批判を投げかけているが、彼の指摘する処は正当である。彼は建大の入試には情実による不正と縁故入学はなかった。この「選抜が厳重であれば、中国人学生の愛国集団の形成に有利であった。もし推薦入学に改めれば、専ら親日分子が推薦され、状況は大いに異なったであろう」との彼の指摘は傾聴に値する。建大内に反日的な傾向が成長したのは、比較的貧しい家庭の子弟が入学した為だというわけである。但し、若干意見が過激になって、事実とマッチしない点もある。然し、私にとって本論文は教えられる処多大であった。日本人にとっては、到底書くことのできぬ論文である。

25. 劉世沢「偽建国大学」『瀋陽文史資料』9 1985

本論文の筆者は建大5期生である。24論文とは異なり、全く感情を混えず、冷静に叙述している。その内容は、建大創立の経過およびその主旨、建大の組織機構と制度、建大の教員と教学内容、建大塾務規定、の4章に分けられている。最後の塾務規定の章に、非常に重点をおいている。日本人の同窓生が塾生活を賛美し、塾生活こそ建国大学の精髓であったとするが、本論の筆者は「塾舎とは学生に対して奴隷化教育および精神的な奴隷化を実施する重要な場所である」と断言している。而して「塾頭は学生が授業、訓練あるいは睡眠の際に、学生の寝具、寝床、背囊、衣類庫および自習室などの場所を絶えず検査した」と語っている。そのような塾頭の具体例として、滝川游軒を挙げている。叙述は頗る冷静であるが、筆者の偽満洲国、建大当局に対する怒りは痛烈である。

26. 「一二・三〇事件」中央檔案館・中国第二歴史檔案館・吉林省社会科学院合編『東北歴次大惨案』中華書局 1989 第5部分に収録されている。

本文は論文ではなく、1941年12月30日に発生した、長春・瀋陽等の主要都市で逮捕された反満抗日運動の活動家（建大生を含む）の逮捕事件に関する資料を編集したものである。その内容は偽満洲国の官吏で、活動家の検挙に従事した者の自供書や被逮捕者の告発書で、建大

生の事件のみを扱ったものではない。この時、逮捕された者は、各大学の学生や公務員など知識人が中心であった。それらの中でも、趙洪（当時の姓名は佟鈞鎧，建大2期生）の告発は最も激烈をきわめている。彼自身の逮捕のことから、獄中生活、野蛮な取調べで獄死した仲間、処刑された仲間のことを物語っている。1945年8月14日、当時の新京監獄内の全政治犯は全部銃殺されることに決定したが、幸いにも武装蜂起した軍官学校の学生によって救出されたことを物語っている。なお、獄の居住・飲食・拷問などについても詳しく述べており、貴重な文献である。趙洪は新中国になってから、遼寧師範大学の教授となったが、現在は定年退職して、大連に居住している。

以上の24, 25, 26の諸篇は、高島稜次（建大6期，故人）によって日本語訳され、建大同窓生の一部に配布されたい。中国人によって書かれた建国大学に関する文章は、以上の3篇にとどまる。

27. 江原節之助「民族の苦悶——創設期の建国大学をめぐる」

『（追手門学院大）東洋文化学科年報』4, 5, 6 1989~91

建大助教授江原の遺稿を、彼の浪速高校尋常科教諭時代の教え子岡崎精郎が整理して、解説を加え、註を施したものである。上述の『歓喜嶺遙か』にも収録されている。建大初期の状況を知る上で、非常に有益である。

28. 楓元夫「世にも不思議な満洲建国大学」『諸君』1983-10

筆者は建大3期生である。

29. 伊藤肇「はるかなる建国大学」『諸君』1970-2

筆者は建大6期生である。建大同窓生が戦後最初に建大について語った文章である。なぜ『諸君』に発表されたのかはわからない。

30. 斉藤利彦「『満洲国』建国大学の創設と展開——『総力戦』下における高等教育の『革新』」, 学習院大学東洋文化研究所『調査研究報告』30 1990

教育史的な見地から建国大学を論じたものである。

31. 志々田文明「『満洲国』建国大学における武道教育」『武道学研究』24-1 1991

32. 志々田文明「建国大学における武道・課外活動」『人間科学研究』5-1 1992

33. 志々田文明「建国大学の教育と石原莞爾」『人間科学研究』6-1 1993

34. 志々田文明「『民族協和』と建国大学の教育」『社会科学討究』114 1993

以上の諸篇の筆者志々田は、早稲田大学人間科学部において武道教育を担当している。

35. 菅原一彪「満洲建国大学と石原莞爾」, 仲条・菅原篇『石原莞爾のすべて』 新人物往来社 1989

36. 中久郎「『民族協和』の理想——『満洲国』建国大学の実験」『戦時下の日本——昭和前期の歴史社会学』 行路社 1992

筆者は建大8期生で、教育学者である。

37. 小山貞知「建国大学と協和会」『満洲評論』16-16 1939

建大生になると協和会に入会させられ、卒業後は協和会に勤務する者が多かったといわれる。本論は建大創立後、間もない時期に、建大と協和会との関係を、協和会の立場で論じたものである。

38. 宮沢恵理子「建国大学と民族協和」(国際基督教大学博士論文要旨 1994)

本論は、宮沢が国際基督教大学比較文化研究科へ提出した博士論文の要旨であるが、未公開である。博士論文の構成は、第1章、建国大学の創設、第2章、建国大学の教育と活動、第3章、学生生活と民族協和の実践、第4章、建国大学の終焉、となっている。筆者は、建大の民族協和を積極的に評価している。

39. 山根「『満洲』建国大学の一考察」『社会科学討究』94 1987

40. 山根「『満洲』建国大学再考」『駿台史学』89 1993

私が建国大学に最初に関心を抱いたのは、1985年長春の東北師範大学を訪れた際、建大1期生的那庚辰氏より一二・三〇事件のことを聞いたことに端を発する。最初の論文は、その2年後に発表したのが、非常に不十分なものであり、建大助教授であった内海庫一郎氏（北大、武蔵大名誉教授）より色々批判を受けた。再考も相変わらず不十分なものであるから、今後を期したい。

× × × × ×

建国大学の事について、色々教示を賜わり、また多数の資料を提供し

て下さったのは、建大7期生の田山実氏である。田山氏は敗戦後帰国して水戸高校に入られたが、その時上級生に小島晋治氏（現神奈川大学教授）がいた由である。建大3期生の阿蘇谷博氏は、建大に関する資料を非常に多く収集しておられる。同氏からも色々教えていただいた。建大7期生の水口春喜氏からは、その著書『戦後50年満洲の回想』を贈られ、多くのことを学んだ。故内海庫一郎教授をはじめ、田山実、阿蘇谷博、水口春喜の諸氏に心より感謝する次第である。(1995.12)

注

- 1) 「『満洲』建国大学の一考察」(39)
「『満洲』建国大学再考」(40)
- 2) 前期新2年は1941年入学の日本人学生で、同年入学した日本人以外の学生は1年生とされた。即ち、日本人学生のみは前期課程2年で修了することになった。建国大学では新3期と称したらしい。
- 3) 作田荘一は京大経済学部教授であったが、建国大学に招かれて副総長に就任、実質的には建国大学の最高責任者であった。「一二・三〇」事件の責任をとって副総長を辞任したが、その後も名誉教授として、時々長春を訪れ講義した由である。
- 4) 江原論文については、拙稿(40)で紹介したことがある。雑誌論文の部(27)にも挙げておいた。
- 5) 「満系」とは、満洲国民の意で用いられたものであろうが、その大部分は漢族で、満洲族や回族もこの中に含まれた。なお、台湾系は日系の中にも含まれたが、それは台湾が日本の植民地だったからである。
- 6) 中久郎は8期生で、戦後帰国して京大教育学部に入学したらしい。ここに挙げた論文は、雑誌論文の部(36)に引いた論文と同一であるらしい。
- 7) 聯歓会とは、建大日本人同窓生と、中国人など他民族の同窓生との交歓会をいう。